



安心・安全な農産物の提供（新大祭・アグリバザール）

松涛

No.24

2008. 3. 5

主な記事

学部長挨拶	2
同窓会長挨拶	3
今年度の活動計画	3
農学部を去るにあたって	4
支部だより	5
職場紹介 ホリカフーズ株式会社	7
特集 田園型政令指定都市新潟市について	8
ペンリレー 同窓生からのたより	10
農学部フォーラム	12
国際交流	13
学部だより	15
編集後記	16

学部長挨拶

農学部長 大山卓爾



2007年4月より、鈴木敦士前農学部長の後を引き継ぎ、農学部長を務めさせて頂くことになりました。国立大学法人化後4年目を迎え、少子化に伴う受験倍率の低下、学部教員定員の削減、外部評価とそれと連動した予算配分など、厳しい風が吹き続けておりますが、教職員、大学院生、学生と手を携えて、伝統ある新潟大学農学部と教育と研究の発展のために鋭意努力して参りたいと考えております。農学部同窓会の皆様方からは、常々物心ともにご厚情をたまわり心より御礼申し上げます。今後ともご声援を宜しくお願い致します。

このたび松涛に挨拶を書くようにご依頼を受け、過去の松涛のファイルを見させて頂きました。松涛は、1975年に創刊され、昔の農学部の様子や懐かしい皆様のお顔を拝見することができ、時代の流れを感じました。私は、1982年4月に東京から新潟へ赴任しました。農芸化学科の肥料及び植物栄養学講座に所属し、馬場先生、五十嵐先生からチューリップの研究や新潟の酒などいろいろと教えて頂きました。当時はまだ上越新幹線も関越自動車道も開通前で、新潟はずいぶん遠い所だと感じました。農学部の学生たちは、とても素直だという印象を受けました。また、当時は学科コンパや運動会等が盛んでした。

その後、4半世紀が過ぎ、平成生まれの学生を迎えるようになりました。最近の学生は個人の生活を大切にしますが、友人作りや、学年を越えた活動が苦手な学生が多くなってきました。そこで、農学部としても、入学直後から学科ごとに大学での勉強方法を教えたり、友達作りの手伝いをしていきます。大学全体でも、今年から、「ダブルホーム制度」という取組みをはじめました。これは、学部の違う1年生から3年生まで約30名の学生グループを第二のホーム（学科が第一のホーム）と呼び、学部、学年を越えた交流を持たせようというものです。ちょうど、古き良き時代の寮生活の現代版を目指そうという企画です。少子化、過保護などにより、大人になりきれない学生が増えつつあることも背景にあります。学生対応の様変わり、卒業生の皆様には隔世の感があると思います。

最近の農学部的话题をいくつか紹介させていただきます。大変嬉しいニュースとしては、本年御退官された楠原征治名誉教授が、平成19年4月、日本農学会において、受賞課題「鳥類の卵殻形成における骨髄骨の機能解明に関する先駆的研究」で、栄えある日本農学賞と読売農学賞を受賞されました。

農学部の国際交流も活発に行われております。農学部は、ボゴール農科大学（インドネシア共和国）、東北農業大学（中華人民共和国）、モンゴル国立農業大学（モンゴル国）、嶺南大学校自然資源大学（大韓民国）、チェンマイ大学農学部（タイ王国）のアジアの5つの大学と学術交流協定を締結しています。2005年9月に交流校から19名の先生を新潟大学にお招きして第1回国際シンポジウムを開催しました。2007年9月には、インドネシアのボゴール大学で、「東南アジア・東アジアにおける食の安全、農業の発展と環境保全」というタイトルで、第2回国際シンポジウムが開催されました。新潟大学農学部からは、教職員20名、博士後期課程大学院生10名、前期課程大学院生12名、学生5名の総勢47名が参加して、学術交流と友好を深めました。参加した大学院生、学生は元気のよいインドネシアの学生達との交流をととても喜んでおりました。派遣経費の一部として同窓会から御寄贈頂いた基金を使わせて頂いたことを報告致しますとともに、ご支援に深く感謝申し上げます。

環境と食

同窓会長 小林 一三



2008年の春を迎えられ、会員各位におかれましては、益々のご健勝、ご活躍のこととお察し申し上げます。

農学部同窓会ならびに新潟大学全学同窓会の活動につきましては、機関誌「松涛」、「雪華」を通してご案内しておりますが、引き続き、ご指導、ご支援をお願い申し上げます。

また遅れておりました同窓会名簿も近々、お手元にお届けできることとなります。是非ご利用下さい。

さて、2007年は環境と食について、いくつかの動きが出てまいりました。

その一つに、京都議定書以来最も消極的とみられていたアメリカ、中国、インドにおいても、地球温暖化の深刻さと意義を認めたことであります。

その象徴的な出来事に、前アメリカ副大統領の言動等の評価で、ノーベル賞の受賞があります。

その時のメッセージで「人類

はいつまでも大量のCO2を排出し続けることはできない。とくにCO2の二大排出国、アメリカと中国は大胆な行動が必要」と述べたことは歴史的なことであります。

一方、京都議定書後の地球温暖化対策を話し合う、国連気象変動枠組み条約国会議「COP3」が始まり、2013年以降の「ポスト京都」の枠組み交渉で、その道筋である「バリ、ロードマップ」に期待がかかってきました。途上国で急速に進んでいる森林減少や、日本の里山の荒廃を見るにつけ、その対策が急がれます。

さらに自給率の極端に低い我国にあつて、異常気象による農作物への影響、石油、ガソリンの高騰、地球規模での砂漠化と水不足など、生命維持に必要な環境問題は喫緊な課題といえます。

私たち会員は農学を学び、それぞれ分野でその専門性を活かして社会貢献をしております。具体的には、大量に在る稲わらからエタノールを、あるいは森林再生につながる木質エネルギーや、炭化の開発などの例があります。同窓会としても、農学部の先生方、職員が取り組んでいる、いくつかの課題につ

いて、側面から強力な支援体制をつくる必要があると考えます。

おわりに、会員各位におかれましては、政治、経済、社会も

2007年度活動計画

幹事長 三 沢 眞 一

昨年度の活動報告でも述べましたように、今後は全学同窓会活動と連携しながら学部の活動を進めてゆくことになると思われます。二〇〇六年に発足した全学同窓会は順調に立ち上がって、活発に活動を始めています。

機関誌「雪華」は年2回の発行を行っていますし、毎年秋には新潟大学・全学同窓会交流会にあわせて、一般市民にも公開して記念講演会が開催され、大勢の参加者があります。

同窓会カード事業もスタートしました。まず一般会員向けのゴールドカード会員の募集が始まり、農学部同窓会でも昨年「松涛」と一緒に入会申込書を同封したところでした。二〇〇七年十一月段階では正会員一五七名家族会員三五五名合計一九二名にとどまっています。一般のゴールドカードには所得制限がありますが、それに入会費や年会費が必要になります。新潟大学カードには所得制限がなく、入会費、年会費も無料です。特典として海外旅行保険がついており、空港のゴールドカード専用ラウン

多難な時代にあつて、健康には十分留意され、明るく、元気な地域づくりにご精進されますことを祈り会長挨拶といたします。

ジが無料で使用できますので、入会すれば絶対お得なカードです。是非ご家族の方も含めて入会いただきたいと思います。なお申込書を無くされた場合には農学部同窓会事務局に連絡して下さい。

学部独自の活動では、久しぶりの同窓会名簿の発行があります。個人情報保護法の関係で発行を見送つて来ましたが、名簿があつての同窓会活動ということで発行することにしました。

しかし掲載不可の申し込みが予想以上に多かつたり、名簿購入希望者が少なかつたりして、発行環境が悪くなつていのが実情です。

二〇〇八年は役員改選の年にあたります。近年常任幹事会の出席率も下がって、気になつていましたので、抜本的に役員の選出方法を検討しようということになりました。副幹事長の方々を中心に検討委員会を設置して新役員の選出について討議を進めています。これに関連しますが、新潟に支部がないのはおかしいので、支部を作れとい

う意見が常任幹事会で出されました。この件も上記委員会で討議を進めていますが、すぐには難しいという事になりました。ただ総会は定期的に開いてほしい、ということになり、今年開催することになりました。是非多数の方から参加をいただきましたと思っています。

農学部では近年受験倍率の低下が問題になっていきます。そのような状況から今年度から、学部の支援を強化しようということで、農学部紹介用のDVDを作成する費用を支援したり、教員が高校へ出向いての受験勧誘や出前講義を行う費用を支援することになりました。これにより平成十九年度は県内外の約三〇高校で教員が学部説明や模擬講義を行いました。同窓生の皆様におかれましては、農学部の魅力のPRへのご協力をお願いいたします。

また同窓会活動を活発にするために支部活動の強化は大切なものです。要請があれば本部から支部総会に駆けつけますと申し上げた所、今年度首都圏支部、と北海道支部から要請があり、出席させて頂きました。今後とも声をかけて頂きたいと思っております。

この他、情報を皆様にお届けする「松涛」やホームページの充実を更にはかつてゆきたいと思っておりますので、会員の皆様方のご支援宜しくお願いいたします。

農学部を去るにあたって

農学部を去るにあたって
— 学生諸君との思い出 —



荒谷 明日兒（農業生産科学科）

新潟を去る日がやってきました。7年という短い期間でしたが、思い出は走馬灯のように駆けめぐります。

赴任した年の後期は、体調を崩しておられた平泉先生の代理で学務委員、翌年は学科長を務めました。3年目に再び学務委員になりましたが、今度は私が体調を崩し、後半は皆さんにご迷惑をおかけしました。それ以降、最後の年まで学務委員を務めました。

赴任当初、自分の学生時代を基準に学生諸君と付き合いを始めたのですが、現実には時代の流れの中で大きく変わっており、戸惑いの連続でした。そのうちに今の学生諸君の抱える不安や悩みがわかるようになり、「亀の甲より年の功」で何か彼らにアドバイスできないかと思ひ、これまで続けてきました。彼らのうち何人かが「あんなこともあった」と思ひ出してくれれば望外の幸せです。

16年には学生のさまざまな相談に乗るように、学生相談室を開設しました。これによって、解決できた事案も多くありました。

16年には「7・13水害復興学生ボランティア」を組織しました。休暇をとって新潟に遊びにきていた卒業生も参加してくれ、感動したことを覚えています。中越地震のときは「中越大地震学生ボランティア」、17年の春には「被災農地支援学生ボランティア」、その後も状況に応じてボランティアを組織しました。

ボランティアに参加した学生のアンケートに「他人のために汗を流す喜びがわかった」、「自分の専門を現場でどう生かしていけばよいか考える機会になった」、「自然の力の大きさがわかった」などの意見があり、準備の苦労が吹き飛びました。これらのボランティアは、多くの先生方、事務の方々、学生諸君の協力があったからこそ成功したものでした。

学務委員を離れての学生との付き合いにも、多くの思い出があります。赴任後2年目ごろから、こちらが単身赴任だという気安さもある、他コースの学生も含めて大勢がアパートにやってくるようになり、明け方まで飲み明かしました。酔っ払っての狼藉に「当分の間、出

入り禁止」を申し渡したこともありましたが、彼らの中には卒業後もアパートを訪ねてくれたり、泊まってくれくものもいます。

先日、彼らから「先生の退職記念に旅行を企画しているから時間をとってほしい」との連絡が入りました。教師冥利に尽きるといったところでしよう。

大学を取り巻く環境は厳しき



良き師、良き環境と学生に恵まれて

池田 武（農業生産科学科）

大学入学から大学院修了までに3人の先生から大きな影響を受けた。

日先生は、北大の育種を出て、当時学部長をやっておられた。心が寛くて、人情味があった。3年生の時は、教授室からどなり声が聞えて近づきがたかったが、4年になって夕方遅くまで実験をしていると「ちよつと来い」と言われて赤ちようちんへつれていって実験の疲れをいやしてくれました。湛水直播の実験方法がまずくて、水がよく抜けた。ある時、部屋に入ってくるなり「新しい靴がよくなったぞ」と言っ

て笑っておられた。W先生は、一高・東大の超理工リートだった。頭が良く、情報に早く、しかも人付き合いが良かった。先生自身は身体が丈夫でなかったで、実験の手伝いはしてくれなかったけど、いろいろの引用文献を紹介してくれ

を増していますが、一人でも多くの学生が勉強・生活の両面で、「ここにいてよかった」と思っ

て卒業できる農学部になることを期待します。

お付き合いいただいた先生方、事務の方々、そして学生・卒業生諸君にお礼を申し上げます。これからは農学部応援団にまわります。

た。特にかわいがられて助手の先生より研究費を使ったかもしれない。

S先生も一高・東大であったが、仕事一徹の先生であった。勤務中に先生の仕事以外のことをしているところなられた。それが結構、私には良くて、それならと朝6時に学校へ行って自分の実験をして、一旦帰宅後に朝食をとって登校した。精神的に鍛えられて、その後の仕事については、この先生の影響が大きかった。

3人のそれぞれ素晴らしい先生に恵まれ、それをミックスしたような先生になろうとしたけれど、どの先生にもおよばなかった気がする。教育については、毎週土曜日の朝は次週の授業の予習日と決めていた。ただ、I先生が亡くなつて5教科を受持った時は、さすがに予習が間に合わなかった。研究では、イ

ネとダイズの栽培的なことをやった。ダイズを含む豆については、留学生を受け持つて海外の雑誌に積極的に投稿した。

作物教室に配属の学生は、皆卒業して途中でやめた学生はいなかった。新潟大に来た時は教授、助教授、助手の3人体制であったが、その後削減されて25年間の勤務中に2度1人で担当することになった。部屋の先輩が良く後輩の面倒をみて、部屋として良くまとまって動いていたと思う。特に60才を過ぎてからは、K君らが良くやってくれた。おかげさまで、作物教室の卒業生数は在任中100名を超えた。

趣味の一つに散歩がある。新潟大は、大学の森をはじめ緑が比較的多い。裏側には海岸、表側には商店街と、昼休みを利用していろいろと散策した。春は緑がきれいで、秋にはメイン道路の紅葉を楽しんだ。こんなに自然に恵まれた大学は少ないと思う。おかげで今まで健康に過ごした。ただ、自然に恵まれ過ぎていて、作物の害虫が多いのには閉口した。

管理運営については、あまり自分に合わないと思ひ積極的ではなかった。ここに来て、7冊の本の執筆に関わり、そのうち5冊については編集に携わった。

25年間、私を見守ってくれた学校に感謝しつつおわかれの挨拶としたい。

支部だより

◆首都圏支部

第21回首都圏同窓会総会を、6月8日(金)新宿中村屋本店で開催しました。総会に先立ち、昭和50年卒の竹腰氏(東海大学医学部)から、「植物によるヒト抗体の産生」の演題で講演をして頂きました。

従来、抗体はヒト血清から調製されていましたが、最近では、遺伝子工学の手法により、抗体遺伝子を導入した培養細胞を培養して生産することが可能となりました。しかし、このような抗体生産では高額にならざるを得ないため、植物で抗体生産をすることを旨として研究を行っ

た結果、高生産株を分離して、ヒト抗体生産をすることが可能となつたとのことです。

竹腰氏の今後の研究の進展を期待したいと思ひます。引き続き総会に移り、来賓としてお招きした三沢教授からご挨拶を頂き、最近の農学部の様子等をお話しして頂きました。他に全学首都圏同窓会の大石会長、鈴木事務局長にも御挨拶を頂いてから、会務報告、会計報告等を行い、懇親会に移りました。今年は何年かぶりで女性が1名、農業工学科5名の方に参加を頂き、来賓を含めて33名の方に出席して頂きました。お互いの近況を語り合うなど楽しく歓談しました。中村屋自慢のカレーを始めとした料理も好評でした。会の最後に写真撮影を行い、土屋先輩の締めで会を終了しました。

その他の活動としては、全学首都圏同窓会総会・納涼パーティー、新潟大学東京事務所の講演会・イブニングセミナーに参加をするなどの活動を続けております。以上。

佐藤 純一(昭47農化)

◆富山支部

平成19年7月27日に星野力教授をお招きし、総会、懇親会を開催しました。参院選が終了してからの開催との思惑が見事にはずれ、投票



日間近の慌ただしい時期となつてしまいましたが、40余名の会員が出席して、盛大に開催することができました。

星野先生から大学の近況をお伺いするにつけ、河渡キャンパスで過ごした会員には隔世の感があります。出席者も半数が五十嵐キャンパス世代となつてきました。

最後には、恒例となつた農学部学生歌を全員で肩組み歌い、古き良き学生生活に思い馳せ、楽しいひとときの終わりにしました。

支部会員については、平成19年度会員も含め、371名の登録があります。なかなか全員の住所確認や登録漏れの調査等はできない状況ですが、できるだけ確認調査し、会員への名簿配布については、継続していききたいと考えています。

昭和58年から長きに亘り事務局長としてお世話いただいた、小林米和氏が退任されました。これまで富山支部が営々と積極的な活動を継続できたのも、氏の多大な尽力によるところです。後進は氏の功績を無にしな

◆秋田支部

いよう、但し、自然体で支部活動を永続的に継続できるようお手伝いしたいと考えています。

小林真一郎(昭53農)

平成19年9月17日に秋田県内で発生した大雨災害は多数の床上浸水や農作物の冠水などの甚大な被害でありました。しかし、この災害を乗り越え9月29日からの第62回国体「秋田わか杉国体」では秋田県民の総力を結集し、天皇杯と皇后杯を初めて獲得したのは大きな自信となつたところです。

私はテニス会場で従事しましたが他県の国体選手からは秋田のお米やお酒が本当においしいと言われ大変うれしくなりました。でも国体後半には関西の選手からお好み焼き屋さんの場所を教えて欲しいなどのリクエストもありました。毎日「きりた



んぼ」でもないですしね……。

さて、平成19年度の秋田県支部の活動は、去る6月30日秋田キャッスルホテルでの総会、12月1日に忘年会を行いました。今回は酒蔵見学からスタート、銘酒が多い秋田ですが参加した会員のほとんどが初めての見学のため試飲コーナーでは大いに盛り上がり、その勢いで忘年会へ突入しました。

忘年会では県立大学佐藤敦先生から9月に急逝された恩師川瀬金次郎先生を偲んで「戦乱の日中両国の架け橋となつた土壌学者の生涯」と題し中国のアルカリ土壌に関する研究についてご講話をいただきました。深いものとなりました。今後も、会員の絆が深まるよう支部の活動を楽しく活発にしていきたいと思います。

生駒 隆一(昭34農化)

◆福井支部

最初に、昨年7月に新潟県中越沖で発生した地震により被災された方々および関係者の方々には、大変なご苦労があったことと思ひます。謹んで見舞い申し上げます。

さて、福井支部は、平成19年10月31日(水)福井市内において「福井松涛会」の総会を開催し、県内在住の同窓生13名が出席されました。最初に北岡会長挨拶を頂き、本年度の同窓会幹事会の報告及び事務局からの事業



報告後、引き続き行われた懇親会では青木氏の乾杯後各自の近況報告などを行い、

思い出話や情報交換等をしてお互いの親睦を深め楽しい一時を過ごしました。
来年度も同窓生の皆様に多数のご出席をいたたくよう活動をして参りたいと思います。

堀 泰宏（平12森林環境）

◆福島支部

十一月の阿武隈川親水公園には、今年も冬の使者白鳥が飛来し、早朝には連なつて飛び交う姿がみられます。

去る六月二十三日、本年度同窓会幹事会が新潟東急インで開催されました。

小林一三会長の挨拶には、新潟大学全学同窓会連合会が設立され、法人化によりいよいよ競争社会に入り、ブランド化への一層の拡充の時期にあること。大学が独自の経済活動を行う中で、農学部が存在価値をアツプさせるため、財政基盤を高める具体的方策の検討の時期にあることなど、今、本学が動乱の真



只中にあることを痛感しました。

このことは、同窓会活動の中にも、大学運営資金、研究資金など大学の自主財源の拡大を計ることが、大胆な大学運営に発展させることに繋がり、コアセクター、フードサイエンスセンターの研究活動、外国大学との国際交流など更に道が開かれることと思われまふ。今こそ、支部活動の充実発展と一層の努力をしなければならぬと思いまふ。

そして、農学部の「研究センター」地域に開かれた大学「指導的人材の育成」という課題への研究実践を築き上げる高等教育の殿堂としての本学の未来の創造を信じてやみません。

高久 英昭（昭32農）

◆長野支部

9月の残暑厳しい日、ホテル信濃路において第11回目の長野県支部の総会が開催されました。支部会員は今年度7名入会

され146名を数えることになりましたが、参加者は10名と常連のメンバーでありました。発

足以来支部長を務めて頂いておりました佐藤正彦さんが10回目を期して顧問になられ、今年度からは、松坂賢新支部長の下で開催されました。例年通り本部

同窓会常任幹事会の報告、支部の会計報告、役員選任等の総会を行い、引き続き情報交換の懇親会となりました。残暑厳しい

日でありましたのでビールが美味しく進み、近況報告の話しははずむ中で、如何にして、参加者が多くなるようにするかの話

しが盛り上がりしました。年会費を集めたら如何とか、長野県は南北に長いので中心である松本市で開催したら如何とか、

総会の時にジャイカで2年間アフガニスタンに派遣されていた春原功治さんに状況の報告をして頂くとか、今井寛（日本

デルモンテ）さんにトマトの話をして頂くとか、色々話が盛り上がりしましたが、後日役員会で

多くの会員皆様の参加を得られる総会を検討することにし、最後に、農学部学生歌、寮歌等それぞれ当時を思い出しながら声高らかに合唱し終宴となりました。

西原 義久（昭43農工）

◆北海道支部

本年度11回目を迎える農学部北海道同窓会は、10月13日（土）

に、旭川市近郊の上川管内比布町にある公営温泉「遊湯びつぷ」で開催されました。

今回の会場は、旭川市周辺や道北方面の会員の多数の出席を期待するとともに、同窓会本部にもご案内申し上げました。

当日は、旭川市とその周辺在住者を中心に、初参加者を含め11名（内来賓1名、女性2名）が集まりました。

平成13年版の同窓会名簿をもとに、今回も100通以上の案内を出していますが、転居などで毎回数通が「宛名人不明」で返送されてきます。どうも平成に入ってから卒業生に転居・転職が多いようです。

さて、当日は、明田川副会長が新千歳空港に迎えた同窓会本部の三沢幹事長に加え、急遽駆けつけた石塚会員の参加がありました。

温泉で一汗流した後、午後5時30分に総会を開会しました。紺谷会長の挨拶に続き、久々に本部から出席された三沢幹事長から来賓祝辞を頂きました。

三沢幹事長からは、独立行政法人に移行した農学部の近況や、新潟大学全学同窓会の動きなど



が報告されました。

その後、平成19年度事業報告と平成20年度事業計画を協議し、それぞれ承認されました。

総会に続く宴会では、地元の西永会員の乾杯の後、各自の近況報告がありました。三沢幹事長からは近年の入試倍率や学生の学力などについても話がありました。

その後、部屋での二次会も又盛り上がりしました。（今回も、何を語り合ったか、いつ寝たか、あまり記憶がありません）

翌15日は紅葉と好天の下、寝不足と昨夜の余韻が残る体調の中、石塚会員から提供のあつた「海の幸」を手し、それぞれ帰途につきました。

以上、年に一度の総会報告です。現在北海道には120人あまりの農学部卒業生が存在していることと思いますが、今まで11回の総会の出席者は延べ40名を数えました。

北海道同窓会の活動は年に一度の総会と会員の本部同窓会への派遣がほとんどすべてですが、総会に続く宴会では、学生時代の思い出を語り合うほか、同業者や異業者との語らいや業務上で縁がある出会いもあるなど、毎回わくわくする思いで出席している会員も多いものと思

います。
ちなみに、私は事務局次長という役柄のため、今まで全回出席しています。

五十嵐龍夫（昭51農）

職場紹介

ホリカフーズ株式会社

別府 茂（昭52畜産）

沿革

ホリカフーズ株式会社は新潟県魚沼市（旧堀之内町）にあります。この地域は、魚沼三山を遠望でき、近くには鮎釣りも

できる魚野川が流れる自然豊かなところ です。一方、新潟県中越地震、二年続きの豪雪に襲われた地域でもあり、自然の厳しさも経験しています。



昭和11年、堀之内町の産業振興を図る目的で堀之内食料品加工組合が発足し、山菜や鶏肉缶詰の製造をスタートさせました。これが現在のホリカフーズ株式会社（株）創立の発端です。戦後、新潟県経済連堀之内工場等を経て、昭和30年に堀之内缶詰株式に改

組、平成10年にホリカフーズ株式に社名変更して現在に至っています。なお、魚沼市には本社及び工場、研究所があり、東京、大阪、福岡に営業所を設けています。

【業務内容】

製造品目は設立以来、畜肉缶詰（牛肉大和煮、コンビーフなど）を主力製品として製造してきました。その後、昭和50年代には缶詰の詰め合わせギフトが急成長したものの、チルド肉加工品や精肉販売の伸長によつて畜肉缶詰の市場環境は大きく変化しています。

一方、昭和40年代半ばに、当社は濃厚流動食を缶詰製品に加工する事業を始めています。それまでの濃厚流動食は病院の厨房で手作りされていましたが、使いやすい製品として全国の病院へ販売する中で、病院や高齢者施設のニーズを調査し、その後さまざまな介護食、低たんぱく食などの開発を進めてきました。ま

た、自衛隊や病院などで缶詰は非常用食品として備蓄されたため、災害時の食のあり方についての情報を長年蓄積することができました。

昨今、多くの缶詰メーカーが、国内生産を東南アジアや中国での生産に切り替えるなかで、当社の設立目的が地域の産業振興のため、海外生産による雇用の空洞化を避けることはなりませんでした。そのため、輸入品と競合せず、地方メーカーでも競争力を発揮できる分野が必要となり、介護食、治療食、非常食（レスキューフーズ）を今後の中核事業として位置づけています。それぞれの分野は、病院などのユーザーの悩みを少しずつ解決してきた経験と高齢化や健康問題、防災意識の高まりなど市場環境の変化から今後の拡大に期待しています。このような分野では、開発型の企業であることが求められ高い専門性が必要となりますので、これまで以上に新潟大学農学部および新潟大学



地域連携フードサイエンス・センターの皆様のご協力を得て、競争力を高めていきたいと考えています。

【当社の新潟大学農学部出身者】

従業員は230名ですが、新潟大学農学部の現在の出身者は2名です。二人とも研究開発分野で活躍していますが、今後は社会的役割を担う業務に取り組みながら、自然豊かなカントリーライフを楽しむ社員が増えたと期待しています。

「特」集

田園型政令市・新潟と

農学部

農学部教授 伊藤 忠雄

浜松市とともに第16番目の政令指定都市となった「田園型」都市・新潟は、とんでもない都市である。水田面積が全国一で食料自給率が70%近い大都市など、これまでわが国には存在しなかった。これには「田園都市」の提唱者エ・ベネザー・ハワードもたまげているに違いない。

それはともかく、田園性を志向する新潟市にはこれまでの政令市のイメージにはない清新なものがある。その一方で、これだけ多くの蒲原平野の村々と合併したのだから、巨大農業都市になるのは当然であろうという冷めた見方もある。要は、湊町と田園が結婚してできた新しいまちが適度な調和を保って個性的な光

芒を放つことが期待されているのである。そのための方策を考えてみると結構難しい面がある。ややもすると通り一遍の都市になってしまいかねないからだ。

そこで頼りになるのが、新潟市と包括連携協定を締結した新潟大学であり、なかなしく農学部ということになる。

われわれは、市長の要請で新市農業構想策定検討会議に参加し、平成16年から2力年をかけて『新潟市農業構想』を取り纏めた。ここでは、広大な田園空間と恵まれた立地条件を基礎に、「食と花」を都市像の主役に位置づけ、具体像として7つのテーマを提起した。併せて、この構想実現のために「実行に関与する主体」

を明記し、行政丸投げにしないで、様々な主体が関わってこの構想を実現していきましようと呼んでいる。当然、「大学」(農学部)への期待は大きく、主体的に関わって欲しい項目は「緑のネットワーク形成による生態系の保全と創出」「にいがたの農産物の発信」など20項目にも及んでいる。

田園型政令指定都市とは、食・農・緑(環境)が主役になったまちである。新潟市では、新年度予算にこれら施策展開の事業を積極的に盛り込み、意欲を示している。新年度からは、市内8大学による「食育」をテーマにした共同プロジェクトも動き出すと聞く。いずれにしろ、農学部の先生方がこれまで種々関わっていた、だいたの仕事が、今後さらに増えていく、いや要請されているということである。そのために組織的な規模で連携し、その成果を世界に発信されることが期待されているのである。



田園型政令指定都市の ビジョンとは？

平田 敏彦（昭45林）

特集を企画した編集委員の方々の意図に反するかも知れないが、原稿依頼が回りまわってきってしまったので、「田園型政令都市」について日頃気になっていたことを書かせてもらうことにした。

まず、市長が政令都市の誕生直前に「分権型政令市」、「田園型政令市」を目指すという方向性を打ち出した。E・ハワードの「田園都市論」（明日の田園都市）から約100年の節目に、新たな都市計画論として都市と田園が真に調和した「新・田園都市論」を展開する意気込みか？と一旦は評価し、感心した。

しかし、その後、新しい都市論としての「田園型政令市」の哲学が示されないまま、単に「田園に囲まれたのどかな政令都市」という、読んで字のごとくのイメージしか浮かんでこない状況になっている。これでは、新潟市民にとっても、外から新潟市を見る人々にとっても、政令都市としての都市をどう創造していくのか、ということが見えてこない。「ああ、やっぱり新潟は米の産地なんだな」ということを再認識させるだけのイメージワードに終わっている。

都市、まして政令都市は、その地域を代表する都市としての機能と魅力を持たなくてはならない。政令都市の中では、農業生産高や食物の自給率が最も高いといった特徴をどう活かしていくかは重要であるが、その前に政令都市としての機能を新潟市はどう担い、どう構築していくのかという、ビジョンを示す責任があると思うのだが……。

さて、最後に取ってつけたようで恐縮だが、あえて農学部と結びつけるとするならば、都市計画的・社会的・経済的・思想的（哲学的）・政策的な意味合いを持つE・ハワードの「田園都市論」を超える「新・田園都市論」を、多様な専門分野を結集して、農学部が主導して創り上げるべきである。これから必要となる循環型社会を目指した都市、食糧危機を迎える時代の都市のあり方については、これまでの工学系からの都市論ではなく、農学系からの都市論が必要になってきていることは間違いないと思う。

青春のふるさとへの 期待

波多野 忠雄（昭30総農）



私の農学部生活は、第一期の先輩が四年次に達し、

教授陣もほぼそろった時であつた。建学の歴史を作る気概が学生にも教授陣にも漲っていた。

当時の新潟は、農地改革によつて生まれた自作農が威力を発揮し、土地改良の急速な進展によつて水田の様相は大きく変貌を遂げ、後に単収・労働生産性共に西日本を凌駕し、稲作先進地帯を構成する土台作りに取り組んでいた。

卒業後、恩師の勧めで国の研究機関で勉強することになり、東北から九州まで転勤生活が続く中で、気候・土壌・等風土とそこから醸し出される日本文化の多様性を肌で感じ、農業の地域性を学んだ。

米の生産調整が開始された年に、高田市の北陸農試に転勤し、新大教授陣を核に結成された「農村問題懇話会」の研究会に参加させていただいた。「イネ単作からの脱却」をテーマに関係者を交えて活発に検討された。こうした関係者との地域課題の検討は、活力の根源となるものである。

二一世紀は持続的な食料生産、エネルギー・環境問題を視野に入れた総合的な農学の教育研究が求められている。

しかし、近年、農学部の名称変更が目につく。私が関わった秋田県立大学の学部名は生物資源科学部とし、バイテクなど先端技術を駆使することに特色を持たせた。それだけに、農業実践現場とかかわる

教育研究が大きな課題であつた。短大の閉鎖を機会に、学部にはアグリビジネス学科が増設され、大潟村の広い農場を駆使して、実践的教育研究への挑戦が始められている。

日本海沿海で唯一の政令指定都市新潟市が、豊かで広大な田園都市として飛躍するために、農学部が科学研究と共にフィールドにアプローチできる条件づくりを市と連携して推進し、松涛で紹介されている「グローバル農学部」の活動がさらに充実し、その存在が一層輝きを増すことに期待を寄せている。

田園型政令市の目指す 方向と農学部の役割

山賀 晃（昭59農）

農学部農学科園芸学教室を卒業して早23年、今はJAで稲作や生産調整などの担当をしています。平成19年は品目

横断的経営安定対策を中心とする農政改革や大幅な米価下落など、水田農業の岐路となる年でした。しかし地球温暖化や原油価格の高騰が叫ばれる現代、この日本で数百年続けられてきた水田農業を守り次世代へ残していくことが、今を生きる我々の責務であると考え日々の仕事に取り組んでいます。

また新潟市が目指す「田園型政令指定都市」優れた都市

機能と豊かな自然環境の調和・共存」も永続的な循環型社会を目指す都市モデルとされています。都市から田園へ人が流れ、田園から都市へ農産物が流れることにより、人・物の交流を通じて「新しい農業・文化」が生まれ、市民が物心両面の豊かさを享受することが出来たならば、たいへん素晴らしいことだと思えます。

今年私は、フィールド科学研究センターの福山教授が、新潟市越前浜の砂丘畑の遊休農地対策としてビール麦を作付し、そこで収穫された大麦を使った地ビール作りのお手伝いをさせていただきました。農村サイドだけでは実現不可能と思われた事業でしたが、産官学の協力によって地ビール販売まで漕ぎ着けた貴重な経験であり、都市と農村の交流によつて生まれた「新しい農業・文化」の一つではないかと思っています。

厳しい経済情勢から変革が迫られる農業、その中で新潟市が示した「田園型政令指定都市」という目標へ向けて、農学部が果たす役割は大きく、新たな発想や着眼点で都市と農村の架け橋となっていきたいと期待しています。



ベニレー 同窓生からのたより

自然環境学部

丸山 一郎 (昭50農化)



このタイトルは学部名を現代の若者に魅力的に感じて貰えるように改名する場合の一例です。というのも、若年者人口の減少に伴う入学希望者の減少が叫ばれて久しいからです。新潟大学の魅力は何か。新潟の魅力は何か。農業です。農業を支える自然環境でしょう。その自然環境が育んだ人間性も含まれるかもしれません。現在、農学部の中には農業生産科学科、応用生物化学科、生産環境科学科、生活環境科学科があるようです。以前の農学科、農業工学科、農芸化学科、林学科に対応するようなのですが、どれがどれに対応するのか私には判りません。農学科と林学科を別すれば、農業工学科と農芸化

学科は何をするところか銘々当初は分からなかったものと思います。長い年月を経て定着してきたのでしょうか。しかし、農芸化学は脳外科学と間違えられたことがありますので、定着したとは言えないまま改名に至ったと考えるべきでしょう。私はタイトルのように(良い例ではないかもしれませんが)学部、学科名を、若者が魅力を感じるように改名することを提案します。21世紀の農・林・畜産・水産業は自然環境の一環として捉えるべきと考えるからです。また、誤解を恐れずに言わせて戴ければ、「農」からは、「小作農」からくる戦前の百姓や、若者が嫌う要素(実態は変わってきているにも拘わらず)が想起されるかもしれません。もちろん農業に愛着を持つている方々や、天職とされている方々が多くいることも承知した上での提案です。小島誠放送大学新潟セン

い、此の欄を借りて学部改名の提案をさせて戴きました(農学を愛する皆様すみません)。改名すれば日本水産学科(甘エビの研究)や地球環境学科(佐渡から環境衛星の打ち上げ)の新たな設置と夢が膨らむかもしれません。自然環境学科は既に在りますが自然環境学部は未だ無さそうです。因みに英名は Department of Environmental Studies でしょうか？ 次回執筆者は、小児科医の不足が叫ばれる折、浜松で内科・小児科クリニックの院長をしている夏目秀彦医師(昭54農化)にお願いします。

.....

よみがえれ、田んぼの生きものたち

藤巻 伸一 (昭58農)

近年、各地で環境保全型農業の取り組みが増え、19年から始まった国の「農地・水・環境保全向上対策」の後押しもあって、田んぼの生きもの調査が盛んに行われるようになった。私もこれまで自然観察指導員の仲間と近所の野山で遊んでいたが、最近では田んぼに駆り出されることが多くなった。

思えば私たちが子供の頃は、田んぼは生きものの宝庫だった。水が入った田んぼには春先からアカガエルの卵がプカプカ漂い、ザリガニやメダカ採りをした。夏の夜はホタル狩り。稲架木に使われるタモの木のうろでクワガタムシを探したし、秋には田んぼの上空を舞うトンボを追いかけた。

新潟県版のレッドデータブック (<http://www.pref.niigata.jp/seikatsukankyo/kankyo/ahogo/1-1.html>)に記載されているメダカやマルタニシ、モノアラガイ、タイコウチなど水田環境で棲息する生きものは少なくない。これまでの調査でもいくつかの希少種が田んぼの周辺環境で見つかっている。先に述べた国の事業では一般市民を巻き込んで活動することを強く謳っている。仲間の指導員は農家ではない人が多い。彼らは、畦への除草剤散布をはじめとする農業使用やパイプ灌漑、中干しなど生きものを棲みにくくする現在の農業のやり方には懐疑的だ。

農業者側はなぜそのような設備や作業が必要なのか？ 一方、市民団体側は田んぼで育つ生きものにどうゆう意味があるのか？ 農業とどう共存させればいいのか？ など、お互い責め合うことでなく、理解し合うよう取り組みを進めることが必要だ。

平成18年には「有機農業の推進に関する法律」が施行された。有機農業自体の普及は技術的な面からかなり難しいと思うが、大学にはトキプロジェクトで培ってきた生態系保全のための技術と経験がある。水田環境において生産と生きものの生息を両立させる考え方や技術を佐渡だけでなく、是非県内に広く発信していつて欲しい。

また、折角このような環境保全の気運が高まっている機会に、県内各地で行われている生きもの調査の方法の統一とデータ集積、県内全域の生きものマップ作りができないだろうか。水田環境を推し測る指標作りも必要だ。田んぼ周辺の生きものは、両生類、爬虫類、鳥類、魚類、貝類、昆虫類など広範にまたがり、種類が豊富で細かな分類には



専門家の指導も不可欠である。大学のリーダーシップと今後の活躍を期待したい。(ささやかながら情報発信します。→<http://nogyouseesai.net/>)

.....

仲間達は今

中川 誠 (平3農工)



① 近況報告

早いもので大学を離れてからもうすぐ丸十五年。入社当初から転勤族を覚悟したものの、これまで異動30回以上、海外勤務は、ここグアムで4回目となります。

日本政府が約7000億円を負担する在沖繩米軍海兵隊(司令部等)の一部八千人とその家族九千人) 移転事業で、その移転先となるグアムですが、移転に直接関連する建設工事が本格化する2010年には、現在のグアム島内建設市場規模の3倍以上のConstruction Force (建設力)が必要と分析されています。市場規

模の急増、日本政府負担金に応じた日本サイドへの配慮を見越して、グアムへの進出機会を検討する日系企業も多くなっています。

こうした状況から私もようやくここに来て、しばらく転勤せずにグアムで過ごせることを期待しています。

② 趣味、または熱中していること

最近、現在小1になる息子の自転車、縄跳び、クロール泳ぎ、キャッチボール練習等々に付き合うのが楽しく、上手に出来る则自分の事のように喜んでいきます。男ばかり3人の兄弟で育ったせい、息子も一番下の弟のような感覚で一緒に遊んでいます。ちなみに子供は3人おり、上から中2(女)、小1(男)、1歳(女)です。

③ 最近、感動したこと

ここグアムには日本人の子女教育(幼稚園+小中学校)の為にグアム日本人学校があります。運動会や学習発表会といった機会に子供達の一生懸命な姿を見ては痛く感動し、日本の未来の為に頑張っていると心の中で応援しています。

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへの意見、提言

学生のみなさんへ向けて。

国際化が進み海外の人との交渉も当たり前という時代には、論理的な思考・緻密な推論に支えられた正確な仕事が必要とされます。その為にはエンジニアたるものが肝要で、その基本は数学であると痛感します。良く学びエンジニアとしての誇りを培って下さい。(自身の不勉強さに自戒を込めて)

⑤ 次回に執筆していただく同窓生の紹介

武島三朗さんを紹介したく。

彼は入学時で私の一期後輩ですが、大学時代を通じて最も多くの時間を共有させていた、たまた一番の友人です。明るく魅力的な人柄にいつもこちらが元気づけられます。

.....

群馬から

池田 紀子 (平17農生)



皆さん、お久しぶりです。

卒業してはや1年が経とうとしています。卒業式が終

わった後の1ヶ月間は、引越しや東京での研修などで慌しく過ごし、5月からは心機一新、群馬に落ち着くこととなりました。現在、私は冷凍食品会社で新製品の開発と導入に関わる業務を行っています。業務では、原料を検査したり、試作を行ったり、製品の官能評価を行ったりと、大学ではほぼ接して来なかった栄養学や食品化学の知識が必要とされています。ですが、研究室に所属していた良かつたと思えることもあります。

私の会社では毎日朝8時から仕事が始まりますが、早起きするのが全く苦ではありません。研究室での生活リズムが体に馴染んでいるので、とても助かっています。また、動植物の原料に関しても、農学の知識が役立つことがあります。社会人1年目は会社に慣れることに精一杯で、まだまだ会社の戦力になっているとはいえませんが、少しでも早く1人前になれるよう日々奮闘しています。

さて、話を改めて、私が現在住んでいる群馬県の大泉町について少しご紹介したいと思います。地図上では、栃木県(足利市)と埼玉県(熊谷市)との県境あたりにある小さな町ですが、日本で1番外

国人(特にブラジル人)の多い町として知られています。町中にはポルトガル語で書かれたお店の看板が多く見られますし、毎年夏には、ブラジル人による本格的なサンバルカーニバルも行われるようです。また、この辺りは猛暑地帯としても有名です。昨年ニユースでも報じられましたが、最高気温を記録した熊谷市、館林市とは隣接しており、大泉町でも驚くような気温を体験しました。一方、冬は晴れの日が多くて助かっています。ほぼ毎日洗濯日和で気分も爽快です。まだまだ群馬については知らないことが多いので、今後いろいろなところに出向いて開拓したいと思っています。

毎日、失敗と成功の繰り返しで心身ともに疲れてしまうこともありすが、ストレスを溜めず、前向きに考えるようにしています。先輩や同期、友達たちと飲みに行ったり、旅行に行ったり、買い物に行ったり、プライベートを楽しむながら仕事がんばりたいと思います。



《第13回》

農学部フォーラム、長岡市で開催

第13回農学部フォーラム実行委員長 三 沢 眞 一

平成7年の冷害を契機に、当時の小島学部長の発案によって始まった農学部フォーラムも今年で13年目になりました。今回は「地震から学び、農の復興へ」と題して、中越震災で大きい被害があった中山間地農業の復興を目指すという目的で、初めて長岡市で開催されました。今回のフォーラムには、農学部や共催の災害復興科学センターの関係者や学生その他、行政関係者、建設会社やコンサルタント、農業関係者、農学部OB、調査などでこれまで交流のあった集落の方達、それに一般市民の方を加えて合計二百十余名が参加し、会場のホテルニューオオタニ長岡のNCホールは、ほぼ一杯になり大変盛況でした。

箕口准教授のユーモアあふれる語り口の司会で、会場の雰囲気がつと和やんで開会を迎えました。大山学部長が開会の挨拶で農学部フォーラムの経緯やボランテアの体験などを披露されたあと、三沢が基調講演として、中越震災に関して農学部教員がこれまで取り組んできた研究成果を紹介しながら、中山間地農業の復興方策について提言を行いました。

講演第一部では「震災から学ぶことー今後の災害に備えて」というテーマのもとで、斜面や地盤の被害状況から地震による被害を軽減するためにはどのようなことをしたらよいかという講演や、農学部が積極的に取り組んだ農業ボランテアの取り組み、それに震災が起きた場合の対処を迅速、的確なものにするためのマニュアル作りの紹介がありました。

以下、講演者と演題です。
1、権田豊准教授・斜面崩壊とその特性の関係ーGIS解析からー、2、森井俊廣教授・中越地震によるため池の崩壊とその特徴、3、片野奈緒美

(日一七卒業現原信)・ボランテア活動からみた災害、4、有田博之・災害対応マニュアルの作成

講演二部では「中山間地農業の復興に向けて」というテーマのもとで、生産基盤の整備の仕方、農地の粗放的な管理の方法、安定的な品質のコシヒカリを生産するためのリモートセンシング利用、更には営農組織の構築支援の取り組みが紹介されました。講演者と演題は下記の通りです。5、吉川夏樹復興科学センター助教・GISを用いた棚田の区画整理手法について、6、岡島毅准教授・家畜、草を用いた土地の管理手法、7、阿部信行教授・リモートセンシングを用いたコシヒカリの品質安定化、8、阿部徳文新潟県農林水産部参事・集落営農の課題

第3部では福山教授のコーディネーターのもと、実際に現場で復興に携わっている人々たちから参加していただいてパネルディスカッションが行われました。パネラーは以下の人たちです。

飯高潤(長岡市山の暮らし再生推進室次長、山口孝平(新潟県長岡振興局農林振興

部普及課課長代理)、間野泉一(全日本錦鯉振興会理事長)、田中実雄(森光担い手生産組合組合長)

飯高さんからは、都市と農村集落の交流を進めている状況が紹介され、山口さんから集落営農の展開とかぐらなさんばんに代表される山古志における特産品作りの紹介がありました。野間さんからは養鯉業が若い後継者を中心に元気づく復活している話が聞けました。特に小千谷市の山古志との境界近くの集落に京大出身の才媛が嫁に来たという話には会場もビックリでした。近年外国人のバイヤーも多く、養鯉は重要な輸出産業になっていきます。外人さん相手に活躍するそのお嫁さんの姿が目につかぶようでした。旧小国町の森光集落は農学部と交流協定を結んでいる集落で、棚田米のネット販売や棚田米での酒作りそれにグリーンツーリズムなどに果敢に取り組み、二〇〇七年度の豊か

なむらつくり農林水産大臣賞を受賞した集落です。水害や地震といった災害にくじけずに集落が結束して頑張ってきた様子が紹介されましたが、農林水産大臣賞受賞の紹介に

は農学部のこれまでの支援に對してお礼の言葉がありました。

最後は復興科学センター長の伊藤副学長の丁寧な講評で会を終りました。

アンケートに寄せられ声を見ると、いずれの講演、スピーチも分かりやすく、内容も大変良かった。このような新潟大学の催しをまた中越で開催してほしいという声が多く聞かれました。

当日、多くの卒業生から参加をいただきました。かなり大きい会場がほぼ一杯になり、農学部の活動を中越にアピールできたのではないかと喜んでいます。紙面を借りてお礼申し上げます。



ボゴール農科大学で 国際シンポジウムを開催

農学部国際交流委員会委員長 中 野 和 弘

農学部は平成一九年九月四日から六日までの三日間、国際学術交流協定を締結しているインドネシアのボゴール農科大学、中国の東北農業大学、モンゴルの国立農業大学、韓国の嶺南大学校自然資源大学およびタイのチェンマイ大学の五大学をボゴール農科大学に招聘し、「第二回東南アジアおよび東アジアにおける食料安全保障、農業開発およ



び環境保全に関する国際シンポジウム」を開催しました。本シンポジウムは平成一七年九月新潟大学で開催された第一回に続いて、今回が二回目です。本学からは農学部及び自然科学研究科の教職員・学生ら四七名、各国から一〇三名の代表者が参加し、インドネシア国内の参加者を含めると、総勢一〇〇名超の盛大な国際シンポジウムとなりました。

シンポジウム初日は、本学大学院で博士号を取得したボゴール農科大学「Jaya（ジャヤ）」教授の歓迎挨拶、大山卓爾農学部長の開会挨拶の後、ボゴール農科大学学長とインドネシア農林大臣から祝辞をいただきました。午後は各国代表者から、自国農業の特徴や農業施策に関する考察が報告されました。

これに続いて二日間、約

五〇課題の講演発表と本学大学院生を主体とした約五〇のポスター発表が行われ、会場のいたるところで活発な議論や情報交換がなされました。アジア諸国の大学が国際交流協定校という関係を進展させながら、食料生産、食料安全保障、環境保全という農学部共通のテーマで議論し、認識を深めることができたのは、非常に有意義なことでした。

三日目の見学会では、インドネシアで最も伝統のあるボゴール農科大学、約二〇〇年の歴史を誇るボゴール植物園そして茶園や紅茶工場などを訪問しました。同日夕刻からはお別れ会が開かれ、各国代表者による謝意の披露の後、郷土色豊かな舞踊が続きました。なかでも期間中に精力的にお世話いただいた当地学生ボランティアグループが陽気に歌うと、それに合わせて本学学生もステージで歌い出すなど、国際交流の新しい礎が築かれた思いがしました。

以上の日程の他に、九月七日は本学教員七名による

短期授業も開講されました。各教員は同じ専門の教職員・学生を対象として研究紹介や専門授業、演習等を行い、新潟大学への留学を呼びかけました。

本学の参加者の中には、初めての海外渡航という学生もあり、不慣れた気候や食生活での健康不良が心配されましたが、事前のオリエンテーションのおかげで大事には至りませんでした。学生の皆さんからは、「他国の教員を前に英語で発表や議論ができて今後の自信となった」、「インドネシアの文化や食生活に触れることができて嬉しかった」、「現地学生との交流など貴重な経験ができた」などの体験談が寄せられました。

なお、第三回目は平成二一年新潟大学で開催されることになりました。

また、本シンポジウム開催に際し、農学部同窓会から多大なご支援を賜りました。ここに記して深く謝意を表す次第です。



学部だより

学教員や研究者を輩出した例は極めて珍しいと思います。

天野先生を偲んで

佐藤 幸生（昭48農）

天野（旧姓平田）幸治先生は、平成17年7月24日に97歳11ヶ月の生涯を終えられました。先生は、明治42年（1909年）7月28日岐阜県関市でお生まれになり、東京帝国大学農学部をご卒業後、大原農業研究所（現岡山大学資源生物科学研究所）、東京帝国大学農学部副手、千葉園芸高等学校（現千葉大学園芸学部）教授を経て、1950年に新潟県立農林専門学校教授、1951年新潟大学農学部教授として赴任されました。そして1975年に定年退官されるまでの25年間、うどんこ病菌研究と教育にあたられ、55名の卒業生を送り出しました。その中には大学の教員8名の他、国公立試験研究機関の研究者あるいは教員を多数輩出しましたが、地方大学の1研究室でこれほど多くの大

昨年11月半ばに、信濃川沿いにある新潟グランドホテルで、卒業生による「天野幸治先生を偲ぶ会」が催され、先生とのお付き合いは昨年12月に亡くなられた先生の奥さんを含めての思い出話に花を咲かせました。先生との出会いがきっかけで人生が大きく変わった卒業生が沢山おられると同時に、先生の教えをそれぞれの人人生に生かしている方も沢山おられることを確認した「とても素敵な会」でした。この会には先生のご子息全員がご参加されたこともあって、卒業生が先生のご家族共々との交流の中で育ち、研究室が築かれてきたことが印象づけられました。第20回卒業生の我々は、研究室の第1回卒業生から存じ上げていることを自慢の種としてきました。が、我々に多くの財産と宿題（研究課題）を残してくださいました先生に厚く感謝するとともに、心から先生と奥様のご冥福をお祈りします。

川瀬先生を偲んで

佐藤 敦（昭41農）

川瀬金次郎先生が2007年9月20日に亡くなられました。享年97歳でした。先生は1910年東京に生まれ、1934年東京帝大農学部農芸化学科を卒業されました。先生の業績は3つの時期に区分されます。第1期（1934～1953）は我が国におけるアルカリ土壌の先駆的研究である満鉄・大陸科学院土壌学研究室時代の「アルカリ土壌に関する研究」です。第2期（1953～1975）は新潟大学農学部土壌学教室の教授として新潟県の水田土壌に関する研究に取り組み「日本の水田土壌写真集」（1963）を出版され、「環境放射能に関する総合研究」等を精力的に推進された時期です。先生は教育・研究の傍ら、農学部長（1967～1969）、原子力委員会委員長（1970）、ペドロジスト懇談会会長（1967～1971）、日本学術会議会員（1972～1

ります。



1998年夏
中国公主嶺農業科学院にて

新任教員紹介

応用生物化学科
准教授 鈴木 一史

（昭63農化）



平成18年7月に着任し1年半が経過いたしました。

1975）、土壌肥料学会会長（1973～1974）など一土壌学者として数多くの社会的重責を担われました。第3期（1975～2007）は東方科学技術協力会の副会長、会長として数百万haに及ぶ中国東北三省の強アルカリ荒廃地における植生回復事業に邁進された時期です。この仕事を通して先生は旧知の大陸科学院、長春畜産獣医大学、ハルビン東北農学院および吉林省農業科学院等の朋友、後輩および教え子と我々新潟大農学部同窓生との「桃李滿天下」の絆を築いて戴きました。先生の土壌学を架け橋とした日中両国の科学技術交流および後進の指導に対して勲三等旭日中授章（1982）、中国東北農業大学名誉教授および中国吉林省政府「長白山賞」（2000）がそれぞれ授与されております。先生の70有余年にわたる土壌学を土台とした食糧生産と環境修復に関する研究は、地球規模の気候変動、土壌・水資源の荒廃および食糧危機等が加速する21世紀において益々重要な意味を持つてくるものと確信してお

私は本学応用微生物学研究室で修士課程を修了後、民間企業に6年間勤務し、その後、本学博士課程を修了し学術振興会特別研究員を経て、アメリカで6年半の研究生活を送つてまいりました。6年半振りの日本・新潟となります。アメリカではテキサス・

フォートワースのノーステキサス大学とアトランタのエモリー大学で細菌の遺伝子発現調節機構に関する研究を行っていました。周りに日本人が少ない環境でアメリカ生活をスタートしたので、苦労が多かった反面、日本の日常では経験できない貴重な体験をすることが出来ました。さらに、

「サイエンスは共通の言葉」であることを実感いたしました。留学等を考えている方には、日本人が多くない環境に身を置くこともお勧めいたします。民間企業やアメリカでの経験を生かし、研究及び教育に邁進していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

応用生物化学科

准教授 原田直樹



平成19年
4月1日付
にて着任いたしました。

埼玉県（旧大宮市）出身で、その後、千葉、東京、茨城と移り住み、この度新潟に参りました。地元を離れてからは県境を越える度にひとりずつ

家族が増え、末っ子は新潟生まれです。

専門は土壌学ですが、修士課程修了後一旦製薬会社に就職しました。そこで分析と開発調整の仕事に8年間従事しました。しかしやはり土壌の研究がしたくて大学院に戻り、水田土壌表層の光合成細菌の研究で学位を戴きました。その後、民間の研究所に再就職して土壌修復に関する研究を6年間行い、この4月からこちらでご厄介になっております。思い返してみると結構ふらふらしておりますので、新大では腰を落ち着けて教育研究に打ち込みたいと考えております。

また今後の研究としては、水田土壌の微生物生態や汚染土壌の微生物修復、地域の土壌を巡る諸問題の解決に注力したいと考えています。今後ともよろしくお願い申し上げます。



生産環境科学科

准教授 村上拓彦



平成18年11月1日に着任しました。リモートセンシングやGISを駆使して各種空間解析を行うといった研究を行っています。学位は九州大学で取りました。つくばの農業環境技術研究所で3年近く働いていたことがあります。その後、九州大学で6年間助手を務め、そして新潟に赴任してまいりました。

新潟に来てすぐ西の方に存在感のある山があることに気付きました。地図で確認すると弥彦山。もっと調べてみると雪彦山（兵庫県）、英彦山（福岡県）と並んで日本三彦山だとか。実は私の名前の「彦」は英彦山からきております。何とも運命的な出会いです。この事実を知った瞬間から、弥彦山は私にとって特別な存在になりました。そして、この新潟という地にも愛着がわきました。

さて、時代は常に変化し、古い学問分野に固執してはい

けないという批判を時々耳にします。しかし、林学魂を誇りにこれからの日本の森林・林業を考えていきたい……そんな大学教員でありたいと思っております。

中越沖大地震に 支援金を拠出

全学同窓会運営委員会より、大学が行う災害支援事業を支援する形で各学部同窓会から支援金を募りたいとの要請があり、7月末に本同窓会として10万円を拠出したしました。

農学部同窓会 名簿の発行

第10回同窓会名簿を平成20年2月に発行し、購入予約をされた方にのみ頒布しました。部数予約印刷のため在庫はございません。

今回より個人情報保護の観点から、事前に同窓生各位に住所等掲載の可否を照会した上、同意の得られた方のみ住所等を掲載してあります。購入されました皆様におかれま

しては、名簿のお取り扱いには十分ご配慮くださるようお願いいたします。

「松涛」の 送付について

「松涛」は同窓会名簿に住所を掲載していただくも、また、同窓会に加入していただいても住所の判明している卒業生全員に送付しております。卒業後に住所を変更され、同窓会に連絡がありませんと以後連絡のとりようがなく、多くの「松涛」が返送されてまいります。

「松涛」が届いていない方や住所変更のありました場合は、葉書で送付先を同窓会事務局までお知らせくださるようお願いいたします

農学部の動向

叙 勲

高田和彦名誉教授（林学科）、継田視明名誉教授（林学科）の両先生が、平成19年

秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章されました。おめでとうございました。

受賞

楠原征治名誉教授

「鳥類の卵殻形成における骨髄骨の機能解明に関する先駆的研究」で平成19年4月「日本農学賞」と「読売農学賞」を受賞。

中野和弘教授

生産環境科学科・白井善彦（平12年生環卒）・水谷純（平6年生環卒）、「異常鶏卵の非破壊検出法に関する研究」で農業施設学会論文賞を受賞。

五十嵐龍夫（昭51農学）

「はっか栽培技術体系」で平成19年12月（財）北農会の「北農賞」を受賞。

学位取得

石本万寿広

（昭62農、平元院農（博士）農学）（岐阜大学）

齋藤貞文

（平11生環）、博士（農学）（新潟大学）

退職

生産環境科学科

教授 鈴木正肚先生

平成19年6月

生産環境科学科

助教 細尾佳宏先生

（平成19年10月信州大学へ転出）

農業生産科学科

教授 祝前博明先生

（平成20年4月京都大学へ転出）

また、長年、当農学部のため多大なご貢献をされた次の方々が、平成20年3月に定年退職されます。

農業生産科学科

教授 荒谷明日兒先生

農業生産科学科

教授 池田 武先生

農業生産科学科

教授 長年にわたり積み重ねてこられたご功績に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

倉沢文夫名誉教授（生物化学）

（平18年9月に逝去されました。）

天野幸治名誉教授（植物病理学）が平成19年7月24日に

逝去されました。

教員訃報

川瀬金次郎名誉教授（土壌学）が平成19年9月20日に逝去されました。

丸山岩三元教授（砂防工学）が平成19年10月24日に逝去されました。

春原巨元教授（生物生産情報工学）が平成19年12月26日に逝去されました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

次の会員の訃報が事務局に届けられています。

岩井 功（昭45農業工）

番場 勇（昭24農専農芸化）

庭山和義（昭36林学）

西田信二（昭23農専林科）

片野四郎（昭23農専農芸化）

小林正慶（昭30農学）

永重親男（昭37農学）

小松谷一成（昭39林学）

会員訃報

謹んでご冥福をお祈りいたします。

岩井 功（昭45農業工）

番場 勇（昭24農専農芸化）

庭山和義（昭36林学）

西田信二（昭23農専林科）

片野四郎（昭23農専農芸化）

小林正慶（昭30農学）

永重親男（昭37農学）

小松谷一成（昭39林学）

謹んでご冥福をお祈りいたします。

逝去されました。



編集後記

四年前の中越大震災以来、松涛では、地震を風化させてはならないとメッ

セージを送り続け今回も、

十二月一日

のフォーラ

ムを特集し

ておりま

す。中越の

記憶も鮮明

な、昨年七

月十六日午

前十時十三

分中越沖地

震が発生し大きな被害を受

けました。刈羽村の実家に

居た私は、最初の激しい縦

揺れに「まさか」と思いま

したが、災害は、忘れない

うちにやってくることを痛

感しました。刈羽村は、新

潟大学と連携協定を結んで

おり多くの支援を頂きました。

被災地も着実に復旧・

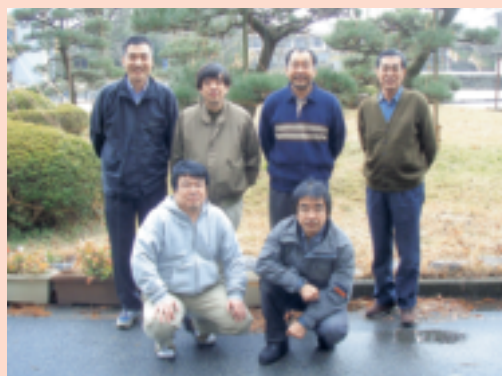
復興に向けて歩み出してお

ります。

年末、農学部研究室のO

B会が長岡市蓬平温泉であ

りました。



震災前に恩

師の退官の

お祝いをし

たところで

あり、先生

からは是非、

また蓬平で

の強い要望

でした。震

災からの力強い復興を感じ

ながら、恩師とそして同窓

生との楽しい一夜を過ごさ

せていただきました。是非、

皆様も、新潟へ、そして中

越へ。

（感謝 H・W）